

財団だより

多摩川

1998.9 第79号



クサガメ (カメ科)
イシガメに似るが甲の色は黒色。わきの下からくさいにおいを出すのでこの名がある。
甲長25cm。



第9回浅川サバイバルレース ('98.7.19)



第8回多摩川いかだレース ('98.7.19)

■多摩川現風景■

(35) いかだレース

夏になると、多摩川の風物詩ともなった「いかだレース」がいま盛んに行われている。

手作りの筏やカヌーを操って競うものだ。勝っても、負けても、楽しく盛り上がる。こういうかたちで川と親しむのも面白い。

7月19日(日)に上流の浅川と、中流の狛江でレースが行われた。

[1] 第9回浅川サバイバルレース

「鶴巻橋」をスタートして11km下流の「万願寺歩道橋」をゴールとするレースである。「手作りいかだ部門」、「既製のカヌー、ボートの部門」、河川敷に捨てられた空き缶を拾いながら歩く「オープンかんとりレース」、800mの短い初心者向けの「第2スタート部門」といろいろな形での参加ができるように工夫がされている。レース参加者は500名にもおよび、その何倍もの見物客が応援した。

[2] 狛江古代カップ第8回多摩川いかだレース

不況にもめげず、昨年の53チームから75チ

ームに飛躍的に参加チームが増加した。お隣の調布市からの参加もあり、源流の小菅村、丹波山村との交流もあった。レース部門では、連続3回優勝の「長門号」が初出場のチーム、ラフティに優勝をさらわれるという番狂わせもあった。ゴールしたチームは川原で盛大なバーベキューパーティを始める。夏の日々の楽しい思い出が誕生する。

●関連する財団の研究助成

〈一般研究〉

- ① 玉川上水系の用水流域住民の意識調査および水辺レクリエーションに関する調査
1988年 小坂克信 八王子市立第三小学校 (No.69)
- ② 河川の学習機能に関する研究—多摩川及び横浜市内河川における子どもたちの活動をケーススタディとして
1991年 並木直美 よこはまかわを考える会 (No.73)
- ③ 野川における児童(親子)の水遊び場、川遊び行動についての実態調査
1996年 尾辻義和 野川で遊ぶまちづくりの会 (No.102)
- ④ 多摩川における青少年のあそびと環境教育の研究
一次世代の多摩川の守り手を育てる—
千葉勝吾 東京都立田園調布高校 (成果印刷中)

多摩川散歩

■みどりのみどころマップを発刊■

多摩北部都市広域行政圏協議会

多摩北部都市広域行政圏協議会（小平市、東村山市、田無市、保谷市、清瀬市、東久留米市の北多摩6市で構成、以後単に圏域という）は、東京都地域づくり事業交付金を活用して、平成10年3月「多摩六都緑化計画」を策定しました。この計画は、平成10年度に各市が個別に策定することになっている「緑の基本計画」をそれぞれの市の市域を越えた圏域としての広がりに関連を持った計画にするための指針となるよう圏域構成各市の緑の基本計画に先んじて策定したものです。今回ご紹介する「みどりのみどころマップ」は、この「多摩六都緑化計画」のビジュアル版として30,000部作成され圏域各市を通じて広く圏域市民の方々へ配布されたものです。

このマップの形状は、大きさA0、110g、古紙

配合率70%の再生紙を8つ折りにしたもので、かつ携帯時の雨対策としてビニール加工を施してあります。

内容を説明します。副題は、「さあ、マップを片手にみどりの探検に出かけよう！」となっています。表面には、圏域内のみどりの拠点や名所旧跡、寺社仏閣などのイラスト地図を中心に、各市のみどころを写真でも多数紹介しております。

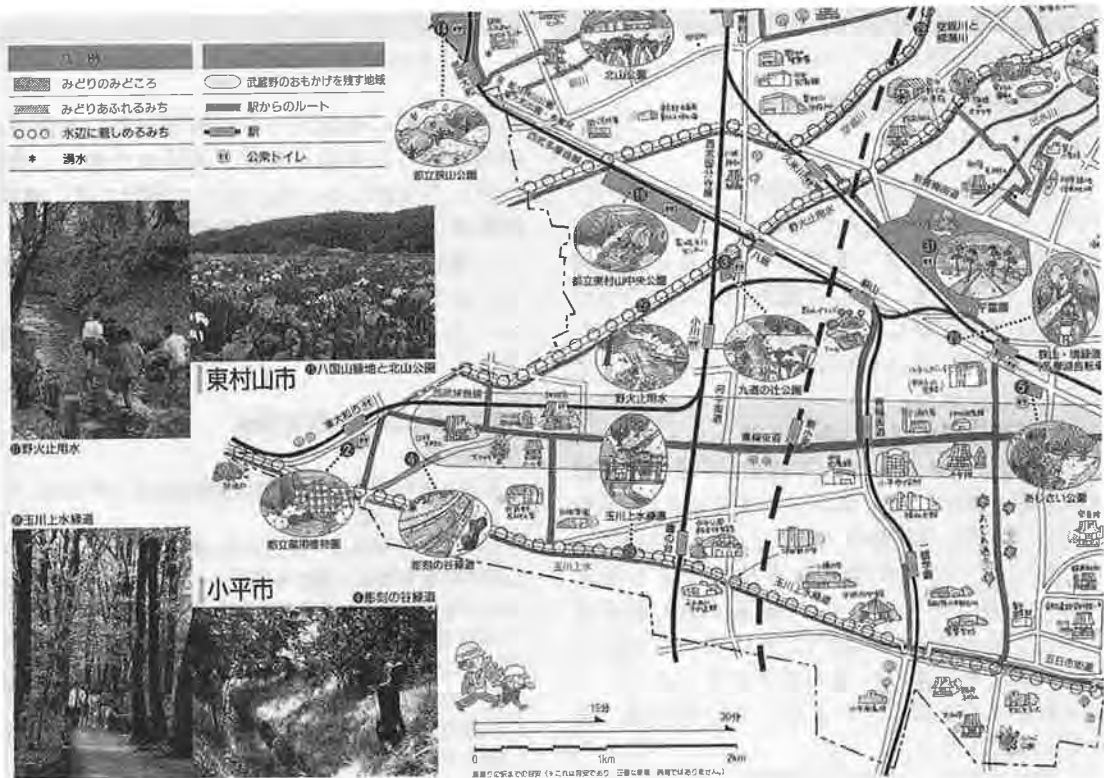
裏面には、一目でわかる圏域の緑の状況が航空写真を使って鳥瞰的に表現されています。合わせて、このマップの本体である「多摩六都緑化計画」の概要が分かりやすく簡潔に説明されています。

◆お問合せ：

多摩北部都市広域行政圏協議会事務局

〒202-8555保谷市中町1-5-1（保谷市役所内）

☎0424-21-2525 内線380・381



▲「みどりのみどころマップ」(部分) 1998年発行

私と多摩川



多摩川中州のカルガモ親子（'93.5）

東京都鳥獣保護員 小野紀之

多摩川、とりわけ世田谷区と大田区に属する河川敷は、私にとって鳥獣保護員としての担当地域でもある。先輩たちの話によると、かつての多摩川は、空気銃などによる密猟が行なわれたりして、その監視が重要な職務だったようだ。しかし、現在そのような危機迫ることはない。

日頃、四季の移り変わりと共に変化する野鳥種を観察していると、多摩川環境の多様性に喜びを感じる。

冬の多摩川は、野鳥の楽園。そこかしこで見られるオナガガモ。大きな集団をつくり、水面で翼を休めるヒドリガモ、ときには草地で餌を探す姿も観察出来る。マガモ、オカヨシガモ、コガモは岸辺近くの浅瀬がお気に入りのようだ。キンクロハジロ、ホシハジロは、この地域ではあまり多く見られないが、河川中央部の深いところを好む。

そんなカモたちも春の訪れに、日を追うごとにその数を減じていく。最近では居残り組も見受けられるが、これはやはり餌付けによる弊害か。

一面の枯野原にも青葉が繁り、わずかに残されたヨシ原ではオオヨシキリが「ギョギョシ、ギョギョシ」と大合唱。中州の水辺ではパンの親

子、カルガモの親子が見え隠れしている。10羽前後のヒナを連れたカルガモを保護者気分で観察を続けていると、日に日に大きくなる喜びと、減っていくヒナの数に自然の厳しさを教えられることしきり。また、ツバメの営巣が住宅街で減っているようだが、その原因のひとつに巣材となる泥の確保の難しさが言われている。多摩川河川敷では、そんなツバメたちが枯れ草と泥を確保している。やがてヒナが生まれると今度は餌となる虫を採るために大忙し。これはスズメやムクドリ、世間で嫌われ者のハシブトガラスも同様だ。どんな生きものでも子を育てる親の姿には心温まるものがある。

夏本番。早朝の多摩川では、中州のあちこちからキジの鳴き声がよく聞かれ、ときには草むらからこちらを観察している。昼間の照りつける太陽をバックにコアジサシが優雅に飛行。見事なダイビングで、小魚を捕っている。

かつて都市の水辺を追われたカワセミ。その姿の復活が都市の自然回復の象徴のように言われたこともある。しかし、今では多摩川のいろいろな場所で見られるようになった。世田谷区二子玉川では2羽、3羽が観察されたこともある。

やがて川面を吹き抜ける風に秋の気配が感じられるようになると、枝先に止まったモズが尾羽をグルリと回している。今年生まれたスズメの若鳥たちが、100羽以上の集団で河川敷を生活の場に行っている。草の実をしっかり食べて、冬に備えているのか。自然は多くの恵みを与えてくれるが、同時に厳しい試練をも与えてくれる。はたしてどれだけのスズメが春を迎えられるのだろうか。

再び冬の使者カモが多摩川にやってきた。私たちは、それをごく当たり前のことと思っている。しかし、その数は年によって変化している。特別な野鳥が来ることよりも、いつもの鳥がいつものように来ていることを、私はこれからも見続けていきたいと思っている。多摩川の水辺に腰をおろし、カルガモの親子を見ながら……。

よみがえ

甦れ！多摩川

■山入川、小津川を歩く■

(1) 山入川

陵北大橋の上から見下ろすと西側方向から山入川が浅川（北浅川）に流入している。

玉石積みの階段状になった堰堤を川は流れている。川原は茂みに覆われていて、水はきれいである。川に沿った公園に続く散策路は緑にかこまれてなかなかよい雰囲気である。

右岸は静かなたたずまいの売住宅地である。

紙谷橋へつく。八王子市にちなむレリーフが欄干に飾り付けられている。木は「いちょう」、鳥は「おおるり」、花は「やまゆり」である。

主婦が3人、私を追い越してスタスタと早足で上流へ歩いて行く。

川は茂みが覆っていて、水が細々と見える。

場所によっては、上から見ると、水の流れが全く見えないところもある。

どこかでウグイスが鳴いている。美紙橋からは左岸側の道がなくなり、右岸側の側道に移る。

美紙橋のたもとには「美紙橋水位観測所」がある。この辺りの水はかなり濁っており、泡もたっている。バイクが川の中に捨ててある。

朽ち果てた橋が骨組みをむきだしにして放置してある。

橋の上には雑草が生えていて、荒涼とした感じである。立入禁止の看板がたっている。

人家が川岸までせりだしているので川に沿って歩けないので、迂回する。

工事の関係か泥のまじった流れが続く。まもなくあぜりや橋につく。岸辺に沿った老人ホームの名からとったものである。庚申塚がたっている。萩園橋に到着する。木造の橋でたいへん珍しい。



低い堰がところどころにありその部分の水はきれいである。特別養護老人ホームがある。

ダンプが次から次へと走ってくる。上流の採石場へ向かって行く。

バスの時刻表をみると、1時間に1本というところで過疎の地へと変貌を遂げているのが実感される。美山橋、山百合橋、栗瀬橋と過ぎ八王子市立美山小学校を過ぎて、山入川が灌木の茂みのなかをくねりながら流れている。

瀬東橋を過ぎ日影瀬東橋までくると流れは全体の1/4ばかりとなり、細々と流れている。

側道、フェンスなどたいへんよく整備されている。セキレイが二、三羽川面を飛んでいる。

小足南橋辺りではブロック積みの両岸にかこまれた草地の真ん中を細い流れが流れている。

採石場を過ぎて仲井橋につく。産業廃棄物の中間処理施設が道際にある。

地藏橋を過ぎてしばらく行くと宝珠橋へ着く、山入川の上流端を表す東京都のイチョウの葉の標識が立っている。

(2) 小津川

小津川と山入川の分岐点に近い紙谷橋に戻り小津川を遡る。元木小学校と川との間の道を歩いて行く。恩方上野原公園を過ぎて茜橋に着く。玉川上水を歩いているような感じで流れは茂みのなかにもぐって見えない。木が頭上をこんもりと枝をかざしており落ち着いた散策路になっている。車が数台道に止まっており、運転手の人はお昼寝の最中である。

モリアオガエル通りという名の道があり、いかにもこの辺の自然の豊かさを偲ばせるものがある。

下恩方工業団地あたりの道路はダンプ街道で轟音を響かせてとばして行く。

桜木橋を少し行くと、水が流れていない状態が続く。この辺のバスは1時間1本のダイヤである。熊野橋のほとりの神社にはりっぱな狛犬が2匹がんばっている。どうしてもこの辺りの川は水が少ない。

採石場があり、さかんにダンプが出入りしている。小津町の中心とみられるところに達する。

中小津、小津会館前、小津町と過ぎ、左岸の緩やかな斜面に里山の風景が展開される。

西沢橋に到着する。だんだん山が深くなって行く流れは溪流の趣をみせてくる。

この先あたりには観光農園、鱒釣り場、バーベキュー場などがあり自然を楽しめる野外施設が完備しているようだ。原橋につく。

向橋のたもとに一級河川小津川上流端の標識が立っている。オオルリらしい鳥が透明な高い声でさえぎっているのが聞こえる。

かわせみ
翡翠

首都圏における多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究、募集

財団法人とうきゅう環境浄化財団（会長 横田二郎）は、昭和50年度より多摩川およびその流域の環境浄化を促進するために必要な研究を毎年公募してきました。既に359件の研究に助成金を交付し、283件の研究成果が完成しています。

平成11年度も従来と同様、意欲的な研究を募集いたします。

記

1. 研究対象者

学識経験者の方はもちろん、一般の方でも研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 研究対象テーマ

- ① 産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- ② 排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- ③ 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査、試験研究
- ④ 多摩川をめぐる自然環境の保全、回復に関する調査、試験研究

3. 応募方法 当財団所定の申請用紙をご請求され、学術研究・一般研究いずれかを選択して、ご申請下さい。

4. 助成の決定 平成11年3月の当財団選考委員会にて選考のうえ、理事会で決定。

5. 研究の種別

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の性格	環境問題改善のための調査研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。	環境問題改善のための調査研究で、一般の市民が、特別の学識経験を必要とせず取り組めるもの。
(財団の過去の事例を参照)		
1件当たりの助成金総額の上限額	600万円	300万円
単年度の助成金上限額	300万円	150万円
研究期間	最長3ヶ年	最長3ヶ年
助成対象費目	(1) 器具備品費 研究に必要な機器（装置）、器具、備品等。研究機関（大学等）に所属されてる場合は、原則対象外。 (2) 消耗品費 調査研究に用いる各種材料、部品、薬品等。 (3) 旅費 調査研究のための交通費、宿泊費等。 (4) 謝金 調査研究のために臨時に雇った人の謝金等。 (5) その他 機器・備品等の借料、通信費、会議費、その他。	

6. 公募締切日 平成11年1月18日

※応募についての詳細は、次頁の財団事務局にお問い合わせ下さい。

▶▶▶ 寄贈文献の紹介 ◀◀◀

● 「山の自然学」
著者 小泉武栄 1998年 (株)岩波書店

誰でも山歩きをしていると周辺の地形、草花、小動物、昆虫等自然に目に入ってくる。本書は、それぞれがどうしてそこに存在しているのかを25編に分けて体系的に平易に解説している。

● 「玉川上水 隠れ綴」
著者 恩田政行 1998年 (株)青山第一出版

著者は玉川上水研究書として「光と影の錯節－玉川上水」（1994年）、「玉川上水に纏うぎ惑」（1995年）、『玉川上水起元剖検－幻の玉川上水』（1996年）、「幻の玉川上水」（1997年）を著す。本書は続編。

第4回 助成研究ワークショップを終えて

8月6日、財団主催による第4回「助成研究ワークショップ」が行われました。今年のテーマは「里やまー人と自然の共生」でした。

日本人がたいへん好きな歌の代表として「ふるさと」という歌があります。「兔追いし、かの山、小鮒釣りし、かの川」と歌われておりますが、この風景はまさしく「里やま」を表すものであります。「里やま」は雑木林、水田など、人の手が加えられており、多くの生き物、植物などにとっても心地よすみかでもありました。人々は「里やま」の落ち葉から堆肥を作り、薪炭づくりのためブナやナラなどの落葉広葉樹を適度に伐採するならわしがありました。

「里やま」の自然は人の手が加えられたものであり、雑木林は、もともとあった常緑のシイやカシなどの照葉樹林の自然林を伐採して、その後植えた落葉広葉樹林からなる二次林なのであります。日当たりのよい落葉広葉樹林には、いろいろな植物が生えて、生き物のこちよすみかとなっています。そこには調和のとれた食物連鎖にもとづく生態系が安定して在り、豊かな景観もあわせておりました。しかし、都市近郊にある「里やま」は、都市化と農業の衰退により、だんだんと失われつつあります。日本自然保護協会は本年、このような状況を危惧して、「里やまの自然しらべ」を日本全国の933ヶ所について、人と自然のバランスを焦点に大規模な調査を実施しました。「里やま」が荒れてきた原因として、宅地開発、ゴミ、過疎、高齢化などを指摘しております。

このような状況を背景として、今回のワークショップは、助成研究のなかで「里やま」に関連するいくつかの研究をえらび、研究者から報告していただき、参加者からの質疑応答、提言をいただき、相互の意見の交流を行うことにより、問題の所在を探り、解決の指針を求めました。

報告はつぎのとおりでした。

- 報告1 ①「多摩川中流域の屋敷林の研究ー特に玉川上水周辺の構成」
②「多摩川中流域における神社の境内の樹木の研究ー特に樹種構成とその配置について」 一秋山 好則一
- 報告2 「多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究」 一久保田繁男一
- 報告3 「多摩川およびその流域の都市化と環境保全」 一中井 達郎一

コーディネーターは芳村、コメンテーターは東京農業大学の進士五十八教授にお願いしました。

前半の報告は、各研究者の熱心な報告でどうしても各人30分という時間のなかで収まりきれずハラハラする場面もありましたが、25分の超過で終了いたしました。

後半の総合討論は研究者同志、それぞれの研究について意見の交換、質問など行いました。

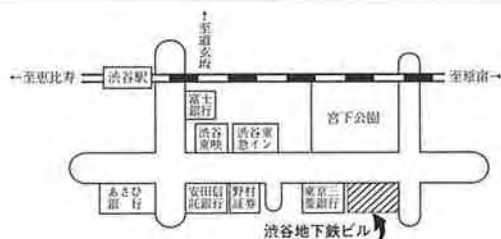
参加者からの質問票はかなり多く、関心の高さがうかがえました。今年は、研究自体に関するこまかい内容についての質問が多かったような印象を受けました。進士先生のお話は体験上、今回のテーマについての本質的な指摘が多く、会場の参加者がうなづきながら熱心に耳を傾けておられる姿が印象的でした。

20分の時間超過で、たいへん盛り上がりのあるワークショップでした。

昨年以上に関心が高く100名の定員に対して、209名の参加希望者があり、ご希望にお応えできなかったことを、主催者としてたいへん申し訳なく思っております。

失われ行く「里やま」に多くの人々が、痛恨の気持ちをおもちになっておられることを、ひしひしと感じました。

- 発行日 平成10年9月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03) 3400-9142
FAX (03) 3400-9141



*印刷所 雄文社 〒336-0001 浦和市常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125